

# 教育研究試論

——形成的環境—人間の教育力——

佐藤良吉

## 目次

(1)人間形成の要因(一)形成要因(二)人間の教育力 (2)家族の感化(一)家族の特質(二)家族の感化 (3)教師と友人の影響(一)教師と子供(二)教師の触発(三)友人の影響 (4)子供に学ぶ(一)子供の発見(二)子供に学ぶ (5)人々の影響(一)ひとの影響(二)未知未見のひと

### (1) 人間形成の要因

(一)形成要因 ひととは自然のなかの生きものの一員であり、動物に系属する一種であることに変わりはない。この意味でみれば、自然と人間は密着して、この両者を切りはなして考えることはできない。このような自然が、ひとの形成にはかり知れない影響をもつのは当然である。ひとはまた社会的動物であるといわれている。社会をはなれて、ひとは一日も満足な生活をいとなむことはできない。このような社会が、知らず知らずのうちに、ひとをその社会に同化し、社会化するのはいうまでもない。文化は他方、ひとを保育する父や母のようなものであるとされている。この意味でみれば、文化をはなれて人間はないし、人間をはなれた文化も考えられない。文化はひとと密着して、両者相即不離、二者一体であるということが出来る。このような文化がひとに影響力を持ち、人間を形成しないはずがない。自然が人間に影響力を持ち、社会が人間を同化し、文化がひとを形成するように、ひと自身もまた人間を教育する。ひとの教育力を無視して人間の教育は考えられない。このことはいいかえれば、ひとの教育

力は形成的環境の要因として、自然、社会、文化の形成諸要因とともに教育構造（人間形成）上、重要必須な地位に位置しているということである。

(二)人間の教育力 以上このように、ひとの教育力は自然の影響、社会の同化、文化の形成諸因とならんで、人間形成上重要な地位と役割をもっているが、そのことは「教育試論」所収、つぎの引例をみてもわかる。

人間形成の要因として、これまで「自然」、「社会」、「文化」の場合を考えたが、第四にその要因として、「人間」そのものをあげることができる。人間が人間形成の要因であることは明らかである。親が子どもを、ある方向に教育したとする。それは親という人間が、子どもに試みる人間形成の努力である。兄姉が弟妹を躱ける工夫をしたとする。それは兄姉という人間が行なう、人間形成のいとなみである。教師が児童を教育したとする。教師という人間がなす教育の活動である。このほか成人が子どもに社会の規範を教え、芸術に親しませ、宗教に触れさせ、風俗、習慣になじませることがある。成人という人間が行なう生活のなかの教育である。

社会が人間を形成するという場合でも、その背後に人間がひかえていることがある。たとえば風俗、習慣についてみると、風俗や習慣は人間のために、人間によってつくられたものである。風俗は人間がつくった生活の様式である、慣習は人間が定型化した行動にほかならない。言語についてみても、同じことがいえる。言語は文化であるが、それは人間が作り出し、人間が用いるという意味で、人間を除くことはできない。道徳の場合にも、このことは当てはまる。道徳は人間関係の規範であるが、人間がいなくては、道徳そのものさえ成り立たない。道徳は人間があって、はじめて存在の価値をもつようになる。したがって人間が道徳的影響を受けるという場合にも、その背後に人間がひかえている。また事物の影響についてみても、同じことがいえる。事物をつくり出したのは人間であり、それをを用いるのも人間である。玩具や、道具やレコード、テレビなど、すべて人間がつくり、人間が用いている。それが影響をあたえるという場合でも、溯れば人間の影響ということができる。

自然からの影響という場合でも、その間に屢々人間が介在していることがある。自然に直接接触れ、自然の美しさに心を打たれたという場合には、もはやそこに人間の介在する余地はない。しかし同じ自然に触れるという場合でも、他の人の示す反応に共鳴したり、反発して見ていることがある。文学作品や芸術作品の影響をうけて、自然を見ている場合も少なくない。こうした場合には、自然のほかに、人間の影響がはいっている。社会生活のなかで、みんながみんなを教育しているという場合には、いっそう人間が形成の要因となる。われわれは社会をはな

れて、生活することはできない。社会生活は、家庭や近隣や、学校や職場での人間関係である。こうした関係のなかで、人間は直接、人間と接触して生活している。ある時は意識的に、ある時は無意識的に影響しあっている。成人、子どもの別なく、老若男女を問わず、互いに影響をあたえあっている。成人が子どもを教育するだけでなく、子どもが成人を教育していることもある。われわれ成人が、子どもに影響されていることは、決して珍しいことではない。

ひとの教育力が人間の形成環境として、教育上重要な地位をもっていることは、以上の諸例のほか、さらに(1)家族の感化、(2)教師や友人の影響、(3)子供に学ぶ、あるいはひと相互の交流、邂逅のなかでみられる、(4)人々の影響感化力の事実についてみればいっそうよくわかる。

## (2) 家族の感化

(一)家族の特質 人間がひとにおよぼす教育力についてみる場合、まず第一に気づくのは、家族相互の影響力の大きさである。家族は家庭を生活の場とする、血族の集合体である。家族の構成は、夫婦だけの場合は夫と妻の二人、親子の場合には父母と子供、子供からみれば両親と兄弟姉妹ということになる。きょうだいの別も男あるいは女だけ、あるいは男女両方がいる場合もある。人数はひとりまたは数人、このほか子供からみて祖父母がおり、叔父や伯母がいるということもある。

いずれにしても家族の特質は、家族が愛情、信頼、同情、理解、協同、協力、慰労、扶助、庇護や愛育、あるいは習俗、習慣、道徳、宗教、趣味など、共通の家族感情で結ばれていることである。事実、家族間にこのような家族感情の連帯がなかったら、家庭という一つの場所で、長い期間、多人数が寝食をともに生活することはできない。夫婦はもともと他人であり、兄弟姉妹も他人のはじまりであるといわれている。このような家族が、夫婦の場合には一生、子供の場合でも独立までの長期間、ともに労苦を分けあって生活できるのも、その背景に以上のような家族感情の基礎があればこそである。

家族にとって、家族感情の基礎がどれほど必要なものであるかは、子供の養育の事実についてみればわかる。とりわけ乳幼児の場合は、かれらは未熟で、かれら自身、自分の力だけでは何ひとつできない。歩くことはもちろん、立つことも這うこともできない。からだを横に向けかえたり、仰臥したりすることも思うままにいかない。食べることや飲むこと、寝ることや起きること、着物を着たり脱ぐことまで、すべて家族の手をかりてしている。呼吸し、眠り、排泄することは、生理によっていつでもどこでもできるが、寝床の仕度や排泄の後始末は家族の手助けに依存している。ましてかれらが好む産ぶ湯にひたり、あたたかい着物を身につけ、快よい時間をすごすには、家族感情に支えられた家族の愛育、庇護がどうしても必要になる。このことはかれらが独立するまでの長期間、形は変わっても、その必要性は少しも変わらない。

以上このことは子供にかぎらず、大人についても同じようにいえる。大人も生きて生活している以上、日常、誰でも労苦の体験を避けることはできない。老病死苦は思わぬときに襲いかかってくる。人生の不幸に出会って、絶望や挫折を経験することもめずらしくない。家族感情に支えられた愛情や庇護、理解や激励が必要なのはこうしたときである。事実、高齢者は家族の庇護をたよりに老後の楽しみを見つけ、病弱者は家族の援助に支えられて闘病に励むことができる。不幸は家族の慰藉によって和らげられ、苦痛は家族の同情によって癒やされる。死者すら家族の追悼によって供養される。まして絶望は家族の激励によって救われ、挫折は家族の援助によって立ちなおれないはずはない。その背景になっているのは家族感情の強い連帯感であり、家族の共通意識である。いいかえれば「他人は時の花」で、好意も一時的で当てにならないが、家族はそれと異って、いざというときの力になり、頼りになるということである。

このような家族が、互いに影響をおよぼし、およぼされたりするのは当然のことである。事実、子供は家族と生活をともにして、言葉のやりとり

をおぼえ、習慣や習俗になじみ、生活の仕方を学び、経験を深めている。父母の感化に影響されて、ひとの生き方や考え方、あるいはものの感じ方や行動の仕方までも身につけている。兄の影響によって弟が同化され、弟の刺戟によって、姉が影響をうけるということもある。このほか孫が祖父母の影響をうけ、甥、姪が叔父に感化されて、人生の真実を深めるということもある。家族相互の影響が、どんなに大きいものであるかは、これらの諸例によってもわかる。

家族の特質の第二は、生活をともにする期間が長期間にわたること、それだけ相互の影響、刺戟も深く大きいということである。ふつう家族は、夫婦の場合には一生、兄弟姉妹の場合でも、自立までの長い期間、起居寢食をともに生活する。しかもこの期間、喜怒哀楽、幸不幸も分けあって生活するだけに、それだけ影響、刺戟は深く強い。日常的で目立たないが、その感化は広く底深いとみなくてはならない。後年ふりかえって、家族の影響の大きさに驚ろかされるのもこのためである。

(二)家族の感化 以上このような家族の影響の大きさを示す例は数多くある。「矢内原忠雄—信仰・学問・生涯—」(南原繁編)所収、「忠兄さんの思い出」(田原悦子)、「叔父の思い出」(藤井立)、「叔父の面影」(藤井偕子)、「たった一度だけ賞めてくれた父」(矢内原勝)、「父」(矢内原光雄)、「父のこと」(矢内原伊作)、「身近かにあった主人のこと」(矢内原恵子)などもその一例である。そのことは以上の引例が、いずれも家族の影響感化の体験を、鮮烈な印象をもって書き綴っている事実をみてもわかる。このうちまず上出「父」(同上)の場合についてみると、「父の写真を見上げると父は時に優しく、ある時は憂いのまなざしで、またある時は厳しく鋭く私を叱るように見つめています。そしてどんな時でも私には父のあの言葉が神様の声となって聞えてくるのです」と以下のように述べている。この一文をみても父の影響感化が、どれほど大きく底深いものであるかの一端がわかる。

父が召されて間もない頃は、こわかった父ばかりが思い出されました。心配をかけどおしだった私には勿論、母や兄弟にも厳しい人でした。神経質で始終ご機嫌が悪く、甘えるすきもないこわい顔（特に二・二六事件以前はひげを生やしていたので）で、何でも見抜いてしまう鋭い目で私を見据えていました。随分叱られたものです。家から放り出されたり、手を縛られて浴室に閉じこめられたり叩かれたり……。また日常生活で例えば食事の時など私達がうっかり世間風な冗談を言って笑ったり、食器をガチャと音立てたりしますと、急に箸を置いてしまっ  
てじろっと睨まれます。悪くいくと雷が落ちてくるといった具合で、私などはびくびくしながら一刻も早く落度のないように食事を終えて自分の室に逃げこむことばかり考えたものです。とにかくこわい人でした。ところが時の経過とともに、あの冷厳でこわかった父の奥に隠されていた暖かい姿、愛情に満ちた心が、しみじみと私の胸によみがえって来て、私を後悔の沼に落とし込みます。

父は自然を愛する人でした。散歩や旅行が好きで、私の小さかった頃の夏の夕方によく散歩に連れていってくれました。どこを歩いたのか記憶が薄れてしまいましたが、林のある丘のような所で苳ミルクをご馳走になったのを思い出します。またある正月休みに藤井家の従兄弟も交えて小仏峠を越えた日も楽しい父の思い出です。残雪の山道を先頭に立って歩いた父、与瀬駅付近の料理屋で青年の様な食慾で冗談を飛ばしながらすき焼を囲んだ父が目に見えます。山中湖畔での毎夏の生活、神様の創造された自然の中であって父は楽しげでした。将棋を教えてくれたのは私が小学生の頃だったと思います。父が幼かった頃田舎の和尚さんに伝授されたとかの「棒銀」と「中飛車」の将棋でしが一、二年もたって父の方が必ず負けるようになってからは対局することがなくなってしまいました。負けるのが口惜しかったのでしょうか。唱歌は下手の横好きでご機嫌のよい朝一高の寮歌など歌っていることがありましたが、そんな時母が面白そうに「お父様は音痴だね」と私に囁いたものです。いつも私と、私の家族を気にかけてくれた父、私が人生の裏道に迷いこんだ中学時代に前田則三先生の許で修養の時を与えられたこと、終戦後の就職難、住宅難のときに当時満洲から引揚げて来たかつ江（現在私の妻）のために大学の社会科学研究所に職を与え、また住居の世話をされ、後には私達の結婚を自ら司会し祝福されたこと、生活の重荷にあえぐ私を叱り励まし、不義理な借財の始末までしてくれたこと、すべてが父の愛情の思い出です。父の召される三週間程前の日、東大伝研付属病院にあった父は、既に呼吸困難な状態が続いている時でした。父の枕元で私が「光雄です、わかりますか」と言いますと、父は確かめるように私の顔を見つめて、「しっかりして、世の中の役に立つ信用される人になりなさい、お世話になった方々を裏切ってははいけませんよ」と、そして最後に静かに「家族を大切にするんですよ」と言って目を閉じられました。その口から涙がぽろぽろと流れていました。至らぬ私の身を案じ、

苦しい病床で父は私の為に祈っていてくれたのです。

家族の影響力の大きさは、またけっして父や母の場合だけにかぎらない。前出「叔父の面影」(同上)は、叔父の影響によって姪が信仰にまで導かれた一例といえる。そこには「叔父から学んだ信仰に支えられて、今日まで歩み得たことは、何んといっても私の最大の感謝である」とつぎのように書かれている。

学生時代の四年間と卒業後結婚までの二年半を叔父の家に寄寓させて貰って、叔父にも叔母にも何から何まで大へん世話になった。叔父は血縁ではなかったけれど、私にとって一番大切な心の拠り所であるキリストの信仰を教えてくれた恩師であり、今でも事ある毎に魂の深いところで、絶えず私を励まし叱咤してくれているので、すでに叔父が世に居ないという実感が今もってうすいのである。今でも時々自由ヶ丘の茶の間にお邪魔していると、二階から咳ばらいをしながら叔父が降りて来て、「偕ちゃん来てるのか、皆元気？」と訊いてくれるような気がしてならない。男の子ばかりの叔父の家庭に、女学校を出たばかりの田舎少女の私を、叔父はほんとうに暖かく迎えてくれて、直接に、或いは叔母を通して、じつに細々とした事にも心を配ってくれた。私が椅子に腰かけて縫物をしているのを見た時も、叔父は驚き呆れて、「おい、偕吉は腰かけて裁縫なんかしてるぜ、チャンと坐ってするように教えてやれよ」と叔母に話したこともある。叔父は中々口の悪いところがあり、親しい間柄では特に歯に衣を着せず、ズケズケ言う。私の偕吉も、余り女らしからぬ態度に対するユーモアであった。叔父に叱られた思い出も数々あるが、その中でも忘れられないのは、私が女子大の三年になった時、叔父の家の窮屈さに少々参って、大学の後期二年を寄宿舍で過そうかと思う、と叔父に申し出たことがある。叔父は意外な、という顔付で一瞬黙っていたが、直ぐ「そんなことしなくていいよ。叔父さんの家にずっと居なさい」と言ってくれた。私の安易遊惰に逃れようとする心情を鋭く見抜いたからにちがいない。その後又私が、自由ヶ丘の聖書集会以外の男子学生と交際したりしたことは、当時従弟たちの映画を見に行くことも許さなかった叔父にしてみれば、とんでもない怪しからぬ振舞であったろう、そんなことはあなた(いつもより改った口調)のdecency(品格)の問題ですよ」と、一言ピシッと注意された。その声音と顔付は年経った今も尚脳裡に鮮やかである。

若い時はいざ知らず、私が知ってからの叔父の唯一の運動は散歩であった。山中湖に行っている時には自転車にも乗ったが、これは湖畔一周の途上大転倒した事もあり、その腕前の程は疑問である。散歩は大好きで、叔母や私もよくお伴し

た。一人でもよく九品仏や桜新町あたりまで出かけた。思索と著述に疲れた頭を癒し、神に祈り神と対話する静かな善き時であった。昭和13年夏山中湖畔の家で「奉天三十年」の翻訳にとりくんで居た時、私は炊事係として随行したが、朝食後間もなく机の前に端座して仕事にかかる時、それこそ食事時間以外は脇目もふらずに精励した。その真剣な気迫と集中ぶりには、見ている私の方まで気疲れするほどだった。しかし、それ以後私の心に怠けたい気持が起る毎に、この叔父の姿が彷彿としてきて、私をいましめた。それから夕方食事前には筆をおいて必ず散歩に出た。叔母と私はよく叔父のことを「エライ寂しがりやさん」と評していたが、叔父が愛用のステッキを携えて一人で散歩に出かける時の後姿には、たしかに孤独寂寥の影がにじみ出ている。叔父ほどの能力と徳性と濃やかな愛情に恵まれた人も、その魂の唯一最大の拠り所は天の父なる神以外になかったのだと思う。そしてそれは後に叔父の臨床で示された強烈な罪の自覚と悔改、そしてイエスの十字架に救を求める切なる信仰にまさしくつながるものであることを、私は学んだ。

高い山の麓に住む者は却ってその山の偉大さを知らずに過す。私も七年近く叔父の許に暮し乍ら、自らの不敏怠惰の故に学ぶべくして学び得ざりし精神の糧が如何に多くあったかと、今にして惜しまれてならない。しかし人生の困難に遭った時に、この叔父から学んだ信仰によって支えられて、とにかく今日まで歩み得たことは、何といても私の最大の感謝である。

### (3) 教師と友人の影響

(一)教師と子供 学校は教師と子供がつくりだす、学習と生活の共同社会である。このような学校には、多数の教師と子供がいるが、実際の学習や生活は、担当の教師を中心に、学級という小社会のなかでいとなまれている。教師の仕事は一般的には、知識や技術を伝えることにあるが、同時に教師が子供におよぼす薫成感化の大きさを見落すことはできない。このような教師の影響は、教室内の授業活動の場合だけではない。それはむしろ生活全体のなかで、時とところとを問わず、四六時中なされるという特徴をもっている。

いずれにしても誰でも、子供時代に影響を受けた、教師の一人か二人かはもっている。そのような教師は、良きにつけ悪きにつけ、深く印象に刻まれて生涯記憶のどこかに残っている。それは教師と子供の出会い、邂



逅とでもいうべきものの結果である。そのような出会い邂逅は、ひとりひとりみな異っている。子供からみて良い教師のこともあれば、そうでない教師の場合もある。尊敬の対象となる教師のこともあれば、その反対のこともある。優しい教師や厳しい教師などいろいろである。事実、子供の出会う教師の実像は一様ではない。心の温まる教師、冷めたい教師、明るい教師、暗い感じの教師、若い教師、年輩の教師、男の教師、女の教師、このほか人間性の豊かな教師や貧しい教師、熱心な教師や不熱心な教師、意欲的あるいは怠情な教師、そのほか個性的な教師やそうでない教師などさまざまである。小説や物語にもいろいろな教師がでてくる。小説「坊ちゃん」(夏目漱石)のなかの教師、「二十四の瞳」(壺井栄)や「破戒」(島崎藤村)にでてくる教師、「青い山脈」(石坂洋次郎)や「春の鳥」(国木田独步)、「一房の葡萄」(有島武郎)のなかのような教師もいる。このほか「小学校の三先生」(吉屋信子)、「小学校の先生」(松本清張)、「新渡戸博士」(矢内原忠雄)や、「純粋な戦慄」(岡本太郎)のなかにみられるような教師もいる。いずれにしても教師が子供に、大きな影響をあたえる実例は数多くある。そのことは朝日新聞(昭和43—5年)所載、「ほんとうの教育者はと問われて」における、つぎの標題からも多くみいだせる。

- (1)吉田松陰(末川博) (2)正岡子規(大江健三郎) (3)安部磯雄(鈴木茂三郎)  
 (4)ヤン・アモス・コメニウス(遠山啓) (5)与謝野晶子(深尾須磨子) (6)藤森良蔵(小島信夫) (7)小繫の農民たち(戒能通孝) (8)新島襄(住谷悦治) (9)黒板勝美(坂本太郎) (10)子どもたち(金沢嘉市) (11)瀬尾貞信(中山恒明) (12)あるアメリカ人医師(犬養道子) (13)翠川淳(加太こうじ) (14)画集と美術論(三雲祥之助) (15)小・中学校時代の先生たち(佐藤達夫) (16)小菅秀直(壺井繁治) (17)岡倉由三郎(中島健蔵) (18)「驢馬」の同人たち(佐多稲子) (19)芦田松太郎(松田道雄) (20)オーギュスト・コント(清水幾太郎) (21)稲沼瑞穂(八杉龍一) (22)新見吉治(福島正夫) (23)佐藤一斎(中村哲) (24)I先生・A先生(柴田翔) (25)坪田譲治(松谷みよ子) (26)K先生・三浦環(斎藤喜博) (27)蜂谷源吾(周郷博) (28)エームス先生(坂西志保) (29)矢島麟太郎・西田幾多郎(唐木順三) (30)菊池慧一郎(田中美知太郎) (31)生みの母(山本安英) (32)斎藤勇(荒正人) (33)ドイツの古典的ヒューマニズム(大塚金之助) (34)父・高浜虚子(星野立子) (35)渋沢敬

三（宮本常一） ③⑥毛利ハツエ（田中澄江） ③⑦〇先生など（嶋岡晨） ③⑧栗野健次郎（土屋喬雄） ③⑨石川剛（中村光夫） ④⑩新聞（秋山安三郎） ④⑪維新後の寺子屋の師匠たち（色川大吉） ④⑫小学校の三先生（吉屋信子） ④⑬松尾捨次郎（中野重治） ④⑭漱石の教育観（林房雄） ④⑮山岡鉄舟（坂東三津五郎） ④⑯安河内泰（奈良本辰也） ④⑰「おかげ人生」（高峰秀子） ④⑱三沢勝衛（藤森栄一） ④⑲羽仁五郎（武谷三男） ⑤⑩狩野亨吉（鈴木正） ⑤⑪雑賀弥之助（宮地伝三郎） ⑤⑫アラン（河盛好蔵） ⑤⑬大作曲家たち（山根銀二） ⑤⑭小学校の先生（松本清張） ⑤⑮L先生（池田潔） ⑤⑯バートランド・ラッセル（市井三郎） ⑥⑰“ライオン先生”梁田貞（岩崎昶） ⑥⑱異邦人（むのたけじ） ⑥⑲久保田稲子（淡谷のり子） ⑦⑩入部亀治・金田安（海音寺潮五郎） ⑦⑪「人間」との対話（高田博厚） ⑦⑫光田健輔（神谷美恵子） ⑦⑬トルストイとチェーホフ（中村白葉） ⑦⑭私の「大学」（伊藤信吉） ⑦⑮善意と愛情の人こそ（内村祐之） ⑦⑯創造性生かせる人（川喜田二郎） ⑧⑰中国の二少女（国分一太郎） ⑧⑱大槻菊男（若月俊一） ⑧⑲「歴研」の若い仲間たち（藤間生大） ⑨⑰じゃじゃ馬ならし（瀬戸内晴美） ⑨⑱万人は万人の師（家永三郎） ⑩⑰「人面の大岩」と父（李恢成） ⑩⑱デコボコ先生（木下順二） ⑪⑰渡伊佐松（丸木俊） ⑪⑱エキリブルを与える人（森有正） ⑫⑰三好十郎（秋元松代） ⑫⑱小卒の父（横尾忠則） ⑬⑰サリヴァン先生（埴谷雄高） ⑬⑱藤中先生（大熊信行） ⑭⑰野球部の斎藤先生（萩元晴彦） ⑭⑱答えにならない答え（小田実） ⑮⑰辰野隆（江国滋） ⑮⑱ゆさぶり合う（中平卓馬） ⑯⑰向坂逸郎・長野正義（飛鳥田一雄） ⑯⑱白隠に似た母（水上勉） ⑰⑰おとな不信の精神（岩城宏之） ⑰⑱三木行治博士（石垣純二） ⑱⑰一人の米国人ほか（土橋治重） ⑱⑱「泥足」の達人（前川国男） ⑲⑰渡辺校長と青山先生（小沢栄太郎） ⑲⑱父・吉田富三（吉田直哉） ⑳⑰中井正一（久野収） ⑳⑱名もなき市民（井上正治） ㉑⑰落合太郎教授（野間宏） ㉑⑱私自身（寺山修司） ㉒⑰岸田国土先生（小山祐士） ㉒⑱あらゆる雑多なもの（古山高麗雄） ㉓⑰人生の恋人たち（半谷高久） ㉓⑱赤土に残る人類文化（相沢忠洋） ㉔⑰高田朝吉先生（大谷藤子） ㉔⑱新渡戸と内村（武田清子） ㉕⑰沼に輝く月影（渡辺一夫） ㉕⑱イソガイ先生（大島渚） ㉖⑰「他者」を正しく知らしむもの（武満徹） ㉖⑱シンツィンガー博士（川島武宜） ㉗⑰メザシを焼く男（唐十郎） ㉗⑱僧侶の父（武田泰淳）

(二)教師の触発 以上このうち吉屋信子「小学校の三先生」の場合についてみると、その影響力は、つぎの引用のように、同著者にとってほとんど生涯の方向を決定するほどの力をもっていたことがわかる。

私の小学校の初入学は父の任地の地方町だった。その一年生の受持の入江先生は若い優しい女の先生だった。私には女きょうだいはなく母ももう若くは思えな

かった。そのせいで私はこの入江先生がすぐ好きになって学校へ行くのが楽しかった。ところが一学期のなかばも過ぎぬうちに父はちがった土地に転任だった。私は入江先生への、ひとに別れる悲しみというものを七歳で初めて味わった。父の新しい任地の小学校にはいったが、こうした事情が影響してか、同級の生徒にもまた受持の若い男の先生にも少しもなじまず孤独の小学一年生だった。そうした小学生の生活のまま、三年生になった時の鈴木三郎という男の先生、この先生はもう年配のおじさん型ただだに先生という威厳が今までのどの先生より備わっていて私はこわかった。その春の遠足に鈴木先生に率いられて町はずれの山に登った。山道は急坂で私はときどき足をすべらして遅れると、鈴木先生は私の手を引いて山坂をたどられた。先生のその古びた服のズボンの腰に小さなふろ敷包みが結びつけてあるのをなんだろうと考えて見詰めつつ、先生の大きな手にすがって山頂に到着すると、お弁当を食べるのだった。先生が腰に付けていた小ふろ敷包みを開くと竹の皮包みから赤ん坊の頭ほどある大いなる焼きむすびが、ほんがりときつね色におしょうゆのこげめを見せていくつか現れた。古洋服に草鞋がけで腰に焼きむすびの包みを結んだいかにも素朴な村夫子然としたこの先生を私は大好きになりそして尊敵した。

それからまもないころ、綴方の時間に先生から「水」という題が出された。私はどんなことを書いたかいまも覚えているが、くださしいから略すが、次の綴方の時間に先生は私の「水」の綴方を最上級の言葉でほめられて、その作文を声高く教壇で朗読された……。この時まで私は自分が作文が上手だなどといちども考えたことはなかった。それがその日初めてこの先生によって知らされてうれしいようなしいんとするような気持だった。つい昨日まで私の心になかったものが、はっきり形をとって現れたようだった。私がもう昨日までの少女とちがった少女になったのはその日からだった。私はそれまで本を読むことのむやみと好きな女の子だった。その女の子がただ読むだけでなく、人に読まれるものを書きたいといつしか大望をひそかに描く少女に変わってしまった。

ところが、その晩春のころ、鈴木先生は同じ県内の小学校に突然転任された。その時の私の失望落胆は、深刻で二、三日食事ものどを通らぬ悲しみだった。でも幸いに四年生になると、伊東譲という青年教師が私の綴方も読書力も何もかも認めて私という少女に兄のような愛情を持って接しられた。何もかもというのは、ある日先生は黒板に「心」という字を大きく書いて「学校で勉強するのは心を善くするためだ。この級で心のよい生徒」と私の名を呼ばれたのに私は愕然とした。それは「私が意地悪でなくて無邪気」というぐらゐの意味であったろうが…私はその日以来この先生の信用を生涯裏切ってはならぬと子供心に肅然とした。

教師の影響力の大きさを示す例は、また有島武郎「一房の葡萄」のなかにもみいだせる。この物語に出てくる少年は絵をかくことがすきで、絵具ほしさに学校で友だちのものを盗んでしまう。盗みはいけないことであるから、たいていの場合、教師から叱責または処罰されるのがふつうである。教師の側でも、処罰するのが当然であり、そうするのが教師の義務であると考えるのが常識である。しかしこの物語のなかの女教師はそうはしない。この女教師は叱責する代わりに、二階の窓先きまで蔓をからませ、たわわに実のっている一房の葡萄をもぎとって少年にあたえる。そのことが少年の心に深い印象を刻む。この女教師が何か特別の考えがあって、意識的にそうしたのかどうかわからないが、このことを契機にこの少年は変わる。「少しいい子になり、すこしはにかみ屋でなくなった」だけでなく、後年「二度と会えないと知りながら、ぼくは今でもあの先生がいたらなあ」と追想する。つぎに示すこの物語（抜粋）は、教師が子供におよぼす影響力の秘密を、見事に解き明かした名篇となっている。

僕は小さい時に絵をかくことが好きでした。僕の通っていた学校は横浜の山の手という所でしたが、そこいらは西洋人ばかり住んでいる町で、僕の学校も教師は西洋人ばかりでした。そしてその学校の行きかえりには、いつでもホテルや西洋人の会社などがならんでいる海岸の通りを通るのでした。通りの海沿いに立って見ると、まさおな海の上に軍艦だのがいっぱいならんでいて、煙突から煙の出ているのや、檣から檣へ万国旗をかけわたしたのやがあって、目がいたいようにきれいでした。僕はよく岸に立ってその景色を見渡して、家に帰ると、覚えているだけをできるだけ美しく絵にかいてみようと思いました。けれどもあの透きとおるような海の藍色と、白い帆前船などの水ぎわ近くに塗ってある洋紅色とは、僕の持っている絵の具ではどうしてもうまく出せませんでした。ふと僕は学校の友だちの持っている西洋絵の具を思い出しました。その友だちはやはり西洋人で、しかも僕より、二つくらい年が上でしたから、身長は見上げるように大きい子でした。ジムというその子の持っている絵の具は船来の上等のもので、軽い木の箱の中に12種の絵の具が、小さな墨のように四角な形にかためられて、二列にならんでいました。どの色も美しかったが、とりわけて藍と洋紅とはびっくりするほど美しいものでした。ジムは僕より身長が高いくせに、絵はずっとへたでした。それでもその絵の具をぬると、へたな絵さえなんだか見ちがえるように

美しくなるのです。僕はいつでもそれをうらやましいと思っていました。今ではいつのころだったか覚えてはいませんが、秋だったのでしょう、葡萄の実が熟していたのですから。天気は冬が来る前の秋によくあるように、空の奥の奥まで見すかされそうに晴れわたった日でした。僕たちは先生といっしょに弁当をたべましたが、その楽しみな弁当の最中でも、僕の心はなんだか落ち着かないで、その日の空とはうらはらに暗かったのです。僕は自分一人で考えこんでいました。だれかが気がついて見たら、顔もきっと青かったかもしれません。僕はジムの絵の具がほしくってほしくってたまらなくなってしまったのです。

僕はかわいい顔はしていたかもしれないが、からだも心も弱い子でした。その上臆病者で、言いたいことも言わずにすますようなたちでした。だからあんまり人からは、かわいがられなかったし、友だちもない方でした。昼御飯がすむとほかの子供たちは活発に運動場に出て走りまわって遊びはじめましたが、僕だけはなおさらその日は変に心が沈んで、一人だけ教場にはいていました。そとが明るいだけに教場の中は暗くなって、僕の心の中のようにでした。自分の席にすわっているながら、僕の目は時々ジムの卓の方に走りました。教場にはいる鐘がかんかんとう鳴りました。僕は思わずぎょっとして立ち上がりました。生徒たちが大きな声で笑ったりどなったりしながら、洗面所の方に手を洗いにしかけて行くのが窓から見えました。僕は急に頭の中が氷のように冷たくなるのを気味悪く思いながら、ふらふらとジムの卓の所に行って半分夢のようにふたを揚げて見ました。そこには僕が考えていたとおり、雑記帳や鉛筆箱とまじって、見覚えのある絵の具箱がしまっていました。僕はあっちこっちをむやみに見回してから、手早くその箱のふたをあけて藍と洋紅との二色を取り上げるが早いか、ポケットの中に押し込みました。そして急いでいつも整列して先生を待っている所に走って行きました。僕たちは若い女の先生に連れられて教場にはいりめいめいの席にすわりました。僕はジムがどんな顔をしているか見たくってたまらなかったけれども、どうしてもそっちの方をふり向くことができませんでした。そんなふうで一時間がたちました。教場を出る鐘が鳴ったので、僕はほっと安心してため息をつきました。けれども先生が行ってしまうと、僕は僕の級でいちばん大きなそしてよくできる生徒に、「ちょっとこっちにおいで」と肱の所をつかれていました。僕の胸は、宿題をなまけたのに先生に名をさされた時のように、思わずどきんと震えはじめました。「君はジムの絵の具を持っているだろう。ここに出したまえ」僕はもうだめだと思うと急に頭の中に血が流れこんで来て顔がまっかになったようでした。するとだれだったかそこに立っていた一人がいきなり僕のポケットに手をさし込もうとしました。僕は一生懸命にそうはさせまいとしましたけれども、多勢に無勢でとてもかないません。僕のポケットの中からは、見る見るマーブル玉（今のビー玉のことです）や鉛のメンコなどといっしょに、二つの絵の具のかた

まりがつかみ出されてしまいました。「それ見ろ」といわんばかりです。……

「泣いておどかしたってだめだよ」とよくできる大きな子がばかにするような、憎みきったような声で言って、動くまいとする僕をみんなで寄ってたかって二階に引っ張って行こうとしました。僕はできるだけ行くまいとしたけれども、とうとう力まかせに引きずられて、はしご段を登らせられてしまいました。そこに僕の好きな受持の先生の部屋があるのです。部屋にはいる時ほどいやだと思ったことはまたありません。何か書きものをしていた先生は、どやどやとはいって来た僕たちを見ると、少し驚いたようでした。が、いつものとおりのやさしい顔をこちらに向けて、ちょっと首をかしげただけで、なんの御用というふうをなさいました。そうするとよくできる大きな子が前に出て、僕がジムの絵の具を取ったことをくわしく先生に言いつけました。先生は少しくもった顔つきをしてまじめにみんなの顔や、半分泣きかかっている僕の顔を見くらべていなさいましたが、僕に「それはほんとうですか」と聞かれました。先生はしばらく僕を見つめていましたが、やがて生徒たちに向かって静かに「もういってもようございます」といって、みんなをかえしてしまわれました。先生は少しの間なんと言わずに、僕の方も向かずに、自分の手の爪を見つめていましたが、やがて静かに立って来て、僕の肩の所を抱きすくめるようにして「絵の具はもう返しましたか」と小さな声でおっしゃいました。僕は返したことをしっかり先生に知ってもらいたいので深々とうなずいて見せました。「あなたは自分のしたことをいやなことだと思っていますか」もう一度そう先生が静かにおっしゃった時には、僕はもうたまりませんでした。ぶるぶると震えてしかたがないくちびるを、かみしめてもかみしめても泣き声が出て、目からは涙がむやみに流れて来るのです。「あなたはもう泣くんじゃない。よくわかったらそれでいいから泣くのをやめましょう、ね。次の時間には教場に出ないでもよろしいから、私のこのお部屋にいらっしゃい。静かにしてここにいらっしゃい。私が教場から帰るまでここにいらっしゃいよ。いい？」とおっしゃりながら僕を長椅子にすわらせて、その時また勉強の鏡がなったので、机の上の書物を取り上げて、僕の方を見ていられましたが、二階の窓まで高くはい上った葡萄蔓から、一房の西洋葡萄をもぎとって、しくしくと泣きつづけていた僕のひざの上にそれをおいて、静かに部屋を出て行きなさいました。

ふと僕は肩を軽くゆすぶられて目をさました。僕は先生の部屋でいつのまにか泣き寝入りをしていたと見えます。「そんなに悲しい顔をしないでよろしい。もうみんなは帰ってしまいましたから、あなたもお帰りなさい。そしてあすはどんなことがあっても学校に来なければいけませんよ。あなたの顔を見ないと私は悲しく思いますよ、きっとですよ」そういって先生は僕のカバンの中にそっと葡萄の房を入れてくださいました。けれども次の日が来ると僕はなかなか学校に行く気にはなれませんでした。けれども先生の別れの時の言葉を思い出すと、

僕が行かなかつたら先生はきっと悲しく思われるに違いない。ただその一事があるばかりで僕は学校の門をくぐりました。そうしたらどうでしょう、まず第一に待ちきっていたようにジムが飛んで来て、僕の手を握ってくれました。そしてきのうのことなんか忘れてしまったように、親切に僕の手をひいて、どぎまぎしている僕を先生の部屋に連れて行くのです。二人の足音を聞きつけてか、先生はジムがノックしない前に戸をあけてくださいました。二人は部屋の中にはいりました。「ジム、あなたはいい子、よく私の言ったことがわかってくれましたね。ジムはもうあなたからあやまってもらわなくともいいと言っています。二人は今からいいお友だちになればそれでいいんです。二人ともじょうずに握手をなさい」と先生はにこにこしながら僕たちを向かい合わせました。僕はでもあんまり勝手すぎるようでもじもじしていますと、ジムはぶらさげている僕の手をいそいそと引っ張り出して堅く握ってくれました。先生はにこにこしながら僕に、「きのうの葡萄はおいしかったの」と問われました。僕は顔をまっかにして「えゝ」と白状するよりしかたがありませんでした。「そんならまたあげましょうね」そういって、先生はまっ白なリンネルの着物につつまれたからだを窓からのび出させて、葡萄の一房をもぎ取って、まっ白い左の手の上に粉のふいた紫色の房を乗せて、細長い銀色のはさみでまん中からぶつりと二つに切って、ジムと僕とにくださいました。まっ白い手のひらに紫色の葡萄の粒が重なって乗っていたその美しさを僕は今でもはっきり思い出すことができます。僕はその時から前より少しいい子になり、少しはにかみ屋でなくなったようです。それにしても僕の大好きなあのいい先生はどこに行かれたでしょう。もう二度とは会えないと知りながら、僕は今でもあの先生がいたらなあと思います。秋になるといつでも葡萄の房は紫色に色づいて美しく粉をふきますけれども、それを受けた大理石のような白い美しい手はどこにも見つかりません。

青年期には、教師のおよぼす刺戟は鮮烈で、人間の生き方やものの考え方、行動の仕方にまで影響をあたえることがある。人生の岐路の道標となり、その後の生涯の方向を決定するという場合もある。もしこうした教師に出会わなかったら、いまの自分はなかったと思われることすらある。こうした場合の教師は、もはや一個の職業的教師ではなく、ことばの正しい意味での先生、恩師、あるいは師表ということになる。尊敬と敬愛、私淑と傾倒の対象となり、大きな影響薫成力をもつ存在としてあらわれてくる。原田実博士絶筆「片上伸先生の思い出」(昭和49年11月)は、青年期に出会った恩師について、当時の社会状況や思想界の趨勢を背景に、以下引

用のように記している。原田実博士は明治23（1890）年、千葉県に生まれ、大正2（1913）年早稲田大学文学科を卒業、雑誌「教育時論」記者数年、昭和21（1946）年同文学部教授、同35（1960）年停年、早稲田大学名誉教授となった。著書には「国際日本の教育」、「日本の教育を考へる」、「アメリカ教育概説」、「教育原論」、「ヨーロッパ近世教育思想史」、「森有礼」など、訳書には「児童の世紀」、「恋愛と結婚」、「婦人運動」（以上 Ellen Key）、「新教育の先駆者サンダースン」（H. G. Wells）、「経験と教育」（John Dewey）など多数がある。同博士は昭和50（1975）年1月6日午前10時46分、84歳をもって永眠、同年5月4日新緑の多摩霊園墓地に埋骨された。

私は明治41年の3月郷里千葉県安房の中学を卒業した。病弱のためしばしば長期の欠席を重ねての卒業で、私の健康を心配して両親は進学を許さず、中学の先生からもあきらめろとの忠告だった。その年私は田園の間に療養しながら悶々としつつ文学や思想の書物を耽読し、ひそかに来春はと早大の文学科に進学することを決意していた。日露戦勝の気負いから世間は調子づいて、とかく浮薄な楽観的風潮に流れ、政府は心配して勤儉就業を勧奨する戊申詔書というものを出した。ただ日本の思想界や文壇は、世界の風潮からの影響もあり、気安い戦勝の楽観には甘んぜず、人生をもっと苦しい深刻なものとみてこの課題に取りくんでいた。たとえば哲学界は、従来のドイツ流の講壇哲学を不満とし、オクスフォードのシラーのヒューマニズム、ハーバードのジェームスのプラグマチズム、フランスのベルグソンの創造生活論など、直接になまの実生活にぶつかってその真髓をつかもうとする哲学に惹かれ、文壇また従来の戯作流はもちろん芸に遊ぶ底の文学にあきたらず、人間生活の現実直接の面、それが惨じめであっても苦悩であっても、あるがままの生の真実に迫ろうとする写実主義、自然主義の文学が、主張の上でまた作品の上で、深刻な精神運動を盛りあげていた。そしてその精神運動の中心へ早大の文学科が華々しい選士を数多く送り出していた。私はそれに引かれ、翌42年の新学期にはと早大入学を堅く決意した。両親も早大には入試がないと聞いて不承々々許した。当時入試地獄とは言われなかったが、それでも一高の受験などは相当に苦痛とされていた。両親にはひたすら私の健康が心配だった。私は決心どおり早大の文学科に入学した。予科が一年半で、本科が三年だった。予科の課程は語学と今日いわゆる一般教育のようなものだった。

早大の若い俊秀として、文壇の自然主義陣営に際立っていた片上天弦が、予科の教師として英語を受持っていた。天弦は雅号で本名は伸、早大を卒業すると直ぐ講師に抜擢され、二十歳代の半ばだった。先生の英語は語学の授業というより



はもっと深いものだった。私は感激して魅了された。本科大学部は、哲学科、英文科、国文学科、史学科と分れていたが、私は英文科を選んだ。共通科目が多かった。これは経営関係からとも思われたが、私達には効果的だった。おかげで私達は各専門の優秀な先生達の講義をきくことができた。しかし何ととっても私は若い片上伸先生にいよいよ傾向した。先生は引続き文壇に論陣を張りながら学校の講義にも熱心だった。英文科の中心は坪内逍遙、島村抱月、片上伸先生で、逍遙はシェークスピアの講義で評判だったが、しかしバーナード・ショーの婦人観など、新しいところも精細に紹介してくれ抱月は美学や文学論、片上先生は講義もされたが、テキストの講読もされ、ショーのイブセン論などは特に有意義だった。私達は七、八人のグループで研究の会をつくり、しばしば集って片上先生の指導を願い、論談に花を咲かせた。といっても、私達の心は花やいだわけではなく、深刻で厳しい生（ライフ）が常に問題だった。私達は校歌で「輝やくわれらが行手を見よや」などと歌いはたしたが、私達の前には生という大きな灰色の壁が頑丈に立ちふさがっていた。片上先生は一緒になって問題を指導してくれた。大正2年7月に私達は卒業したが、世間向きの大学出ではなく殆んど就職できなかった。

片上先生は直き、早大文学科にロシア文学科設置の抱負を背負ってロシアに数年間留学され、その間1917年のロシア革命をも眼のあたりに見られた。私などロシアからもしばしば励ましの手紙を貰った。先生は帰国後活動はされたが、早逝四十五歳。私の心のふるさと、遠い早稲田の学窓には、いつも片上先生がいる。

青年期はまた、ひとが純粹に生き方や考え方を模索する時代であるともいわれている。それだけにかれらは、教師を尊敬と敬愛、私淑と傾倒の対象とみる反面、また反抗反逆の対象とするという傾向がある。事実、かれらは教師の理解や援助を求める他方では、権威や傲慢に激しく反抗して反逆する。教師がこうしたかれらの内面世界を理解できないか、同感できない場合の両者の裂け目は大きい。いずれにしても教師がかれらに、大きな影響力をもつのは当然であるが、それがつねにかれらに有益であるとはかぎらない。かれらが教師に感化されるのは事実であるが、それがつねにかれらによい影響をあたえるかどうかは疑わしい。そのことは岡本太郎「純粹な生命の戦慄」（「わが思索わが風土」所収）における、つぎの痛烈な教師に対する告発をみてもわかる。ここでは教師の影響が、反面教師として逆作用していることに注意する必要がある。

幼いころ、よく恐ろしい夢を見た。けわしくそそり立つ断崖。私はその真下に、息づまる思いで立っている。高い頂に波頭が白く歯をむき出し、おどっている。満々とした水は今にもあふれ、崩れ落ちてくる……恐怖に身体じゅう冷たくなり、ふるえながら目がさめるのだ。夜、そして夢が恐ろしかった。今にして思えば、それは人生に目ざめるころ、この世界の息づまる圧力の予感におびえたのだろう。絶望的に身構えなければならないという急迫感。その純粋な生命の戦慄だったに違いない。

私は小学校一年のとき四つ学校を変えている。日本橋、青山など東京のまん中ばかり。引越したわけではない。一つ一つの学校にいたたまれなかったからだ。あの窒息させる夢の予感はたちまち身近になった。そのころ小学校の先生といえば神様の次の絶対的存在だった。が、私は彼らの強圧的な表情のなかに、ごまかし、人間的卑しさを直観すると、許せなかった。私は純粋な目で、ただ見かえしたのだ。先生はガタガタになった。大人同士ならまだしも、ヨチヨチした子供に、腹の底まで見すかすような強烈な目を向けられると、こたえるらしい。先生はいらだち、あるいは陰気に、あるいはカサにかかって私を押しやろうとした。しかし私はますます離れて、反抗し、また告発しつづけた。まだ小学一年生の、この孤独のたたかいはつらかった。今でいえば、さしずめ幼い「ゼンガクレン」というところだ。しかし当り前のことだが、そんなころ、ヘルメットもなければゲバ棒もなかった。組織も、セイギノも、イデオロギーも、なんにもないのだ。私はただただ生命的に許せなかった。ほかの子たちは先生のごまかしを見ぬいても、適当に調子を合わせて平気である。もうすでに小さい大人になっているのだ。私は一人ぼっちで血を流した。自殺したいとさえ何度も思った。子供のくせに神経衰弱になって学校を休んだりした。四つ目に学校を変ったとき担任になった先生は純粋な人だった。私は救われた。ところが三年生のとき、新しい校長さんが赴任して来た。英国がえりの、当時教育界で最新の知識で知られた権威者だった。しかし私には何かその人の気取りがやりきれなかった。担任の先生がこの校長とぶつかってやめさせられてしまった。突如先生から別れを告げられたとき、私はこらえきれず激しく泣いた。みんなの前で、初めてだった。あの子は泣くはずがない、どんなときでも強情で泣いたのを見たことがない、牛のような子だ、と学校中で言われていた。それが泣くとは、あれにもどこか純情なところがあるのだな、見直した、と先生達が話していたという。それを後で聞いて、何を！ と軽べつした。不幸なことに、そのあとに来た先生がまた一段と俗物、いやなやつだった。私は再び抵抗した。以後、学校というシステムは私には、まったく耐えしのぶだけの檻になった。

数年前、小学校の同窓会があって、スピーチをたのまれた。かつてのあの校長さんも来賓として出席していた。四十数年ぶりの対面だった。もうひどく老衰し

た彼は、私の顔をつくづくながめながら、夢でも見ているような表情で言った。「岡本さん。私はあなただけは、駄目な、どうにもならない子だと思っていましたが、あなただけがえらくなってしまいましたねえ」私と校長さんの、あの古い昔のズレが瞬間に口をひらく思いがした。教育学の権威……今でもこの人は私を理解しない。だから今も実は「駄目な子」なのだ。ならば認めないという態度をとればいいものを、えらくなりましたねえ、などと型通りのことを言って媚を示す。卑小だ。

こういう恰好だけつけている常識人の間にいるとき、いつも私は言い知れぬ裂け目を感じる。どうしても折合えない 厳然とした裂け目なのだ。この「赤の他人」は、しかしやはり人間の文化風土のなかの永遠の像である。だからただ回避する訳にはいかない。そういう矛盾の中で、なま身が半分切りとられている思いをして生きつづける。強く存在すべきなのだ。はるか高みで、白い歯をむき出した波頭の子感は、今も私に迫ってくる。

(三)友人の影響 人間形成の途上で出会う友人との交際、交流の意味の大きさは、すでに述べた父母や兄弟姉妹、あるいは教師の場合とくらべ優るとも劣らない。とりわけ青年期の交友、交際は純粹無私であるだけに、その影響刺戟は底深く、その結びつきもまた強い。友人との交際、交友の強さを示す例は数かぎりなくある。吉屋信子著「近代女流歌人伝」所収、「ある女人像—今井邦子—」のつぎの記述もその一例といえる。

その機会がなかなか得られず悶々のうちにその年も暮れる冬に、「女子文壇」の投稿家同じ信州の東筑摩郡広岡村の太田喜志子が下諏訪までの峠を越えて横瀬夜雨の紹介状を持って邦子を訪れて来て一泊、冬のひと夜を語り明かした。「私の性格は血統的にも環境の致す処からも人に対して心の底まで直ちに打ち解けられないところがあるので、喜志子さんに対しても初めは他人行儀な心持で話していたけれども、喜志さんがいかにも真実でへだてなく地味だけれど陰のない心持で私に対して下さるのが胸を打ちその玉のような純情を持った喜志さんに敬服し、二人の友情は深く深く内へ深められて行った」——と邦子は後日「交友録」に書いている。邦子はその翌年の1月18日、粉雪の降る朝、ついに再度の家出挙行の壮途にのぼった。母の眼を盗んで脱出するのだから、何も荷物は持ち出せない。やはり風呂敷包一つ、いっちょうらの紅葉の散らし模様の青い地色の縮緬の被布を着て駅に急いだ。旅費は「女子文壇」入選の賞金を蓄えた金7円也。東京まで汽車賃は1円80銭であった。中央本線によって東京飯田町駅(当時の汽車駅)へ着く列車なら8時間で東京へ行けるのだが、彼女はその時は松本から一倍半の

時間を要して上野到着の列車を選んだのは途中寄り道して広岡村の太田喜志子に会って行くためだった。村井という小駅で途中下車、いちめん雪に埋もれた田畑のなかの一本道を辿って松の木の見えるのを目じるしに喜志子の家へと急いだ。やがて大きな屋根の旧家らしい喜志子の家の昼も仄暗い広い土間に邦子は心躍らせて立った。次の汽車の時刻がせまるので、喜志子とは僅かに2時間あまりの対面だった。「東京へお出になるのは羨ましい。しっかりやっておくんさんしね」喜志子は松本訛の言葉で邦子を励ました。そして喜志子の母の心づくしの鰯のお雑煮をふるまった。喜志子は饞別にと大事な蔵書の一冊、与謝野晶子の歌集「常夏」の表紙裏に「明治43年1月18日、わが心の友山田邦子様へ贈る」と記念の文字をしるして渡した。邦子が別れを告げて立ち出る時、喜志子の母はわが家の鶏のいま生んだ寒卵二つと新しい手拭を包んだ紙の上に「志」としるして手渡した。この事を邦子は生涯いつまでも忘れなかった。わが生みの母に情なく扱われて過ごした悲しい娘には、友だちの母の優しさが身に沁みて嬉しかった。

喜志子に村井駅まで見送られて雪の碓氷のトンネルをぬけて邦子は車中で一夜を明かした翌日上野に——ホームに西崎花世が待ち受けて居た。喜志子も花世もこうした「女子文壇」投書家グループの友愛のあたたかさは、まったく明治の文学志望の若い女性の団結力の強さを示して驚異である。邦子さんとは手紙のやりとりは三年も続けていたが、おたがい顔を見るのは初めてじゃから、上野の駅で列車からいちばん最後に降りる者を目当にしてくれと前から打ち合わせてあったが、邦子さんはまだ乗客が全部降り切らぬうちに、まちがえて降りて来たが、わたしはひとめでわかった。青地の縮緬に紅葉を散らした被布姿で聡明な眼の色白の、これほど綺麗な人を生まれてまだ見なかったとわたしは思った」これがその遠いむかしの思い出を語る現生田花世の言葉である。

邦子は母の眼をかすめての家出だったし、夜具など持っていない。母も家出後の邦子を案じて夜具だけでも送ってくれるという母の甘さはみじんも持たぬひとだった。邦子はお貞さん所有の毛布を借りてそれを敷き、掛布団にはお貞さんの掻巻を割愛されて辛うじて寝具に間に合わせた。……けれども、こうした貧しく乏しい二人の女同士の生活が骨肉のような親しさに深く導かれていった。純粋な性格のお貞さんは、「ああ初めてほんとの話の出来る人に出会った気がする」と邦子との共同生活を喜んだ。そしてもう邦子を他人とは見なかった。彼女は短篇小説の稿料が入るや、邦子を連れて松屋呉服店に行き、格子縞の単衣を邦子のために買った。冬の家出で何一つ冬の衣類を持たぬ友のために与えた。しかもそれをお貞さん自身で縫い上げて「さあ、着てごらん」と母親のように少し力んだ嬉しそうな顔をして、邦子に着せて「よく似合う」と喜んだ。生みの母からも示されなかった愛情が邦子を涙ぐませた。

#### (4) 子供に学ぶ

(一)子供の発見 子供は教師に教えられて多くのことを学び、ひとの生き方や考え方、あるいはものの感じ方や行動の仕方までも身につけている。そのことは教育の「教」が、日本語では「教える」、あるいは「おしえ」（訓え）と読み、漢字の語源に「鞭打って学ばせる」という意味のあることからわかる。いずれにしても子供は、教師（大人）から数多くのことを学び、教えられているのはたしかであるが、同時に教師も子供に触発され、子供から多くのことがらを学んでいる事実にも注意する必要がある。しかし実際には教育の歴史に明らかなように、長い間子供に学ぶことの必要を忘れ去っていた時代があった。教育の重心を教師の側にのみおくあまり、子供に目をそそぐことを軽らくみてきた傾向があった。いうまでもなくここで子供に学ぶというのは、子供に迎合したり、追従することを指してはいない。子供の本性に学び、子供の学び方に学ぶことを意味している。いいかえれば子供の本性（児童性）の発見ということである。この意味でいえば、子供に学ぶこと、子供の本性の発見は、子供をひとりの人間とみる基礎理念としても、また子供の本性を知り、子供の学び方に学ぶ方法原理としても必須不可欠の要件となる。十七世紀チェッコの教育改革家 Comenius (1592—1670) が、いち早くこのことに気づき、子供の本性（内面的要求）に根ざした学校の創設を思い立った理由もうなづける。その基礎理念はかれの代表的著作、「大教授学」(Didactica Magna. 稲富栄次郎訳) 開巻第一頁所載、同書名につけられたつぎの副題をみてもわかる。

すべての事を、すべての人々に教えるための普遍的な技術を論述したる大教授学 或はすべてのキリスト教国のあらゆる教区、都市、村落において、男女両性のあらゆる若者が、ただの一人も除外されることなく、迅速に、愉快に、徹底的に科学を学び、徳性を養い、敬虔の心に充たされ、かつまたこのような仕方、青年が現在及び将来の生活のために必要なすべての事物を学び得るところの学校を建設するよりの勧告の書。そして勧告しようとするすべての事柄に関して

は、その根本原理は物の本性から導き出され、その真理は極めて適切な器械技術の実例によって立証せられ、その正しい順序は年、月、日、時に従って明示せられ、さらにまたそれによってこの勧告が快く実現されるどころの容易にして確実なる方法が示されている。

この我々の教授学の目指す全目的は、専ら教師は教えること少くして、生徒はそれによって学ぶことが却って多いような教授法、学校が在来のように喧噪、嫌悪、徒勞の場所とならずして、享樂及び堅実なる進歩の場所となるような方法、キリスト教社会が在来のように暗黒、混乱、軋轢の場所とならずして、それによって却ってより多くの光明と秩序と平和と休息とを得るような教授法を探究し発見することに存している。

(二)子供に学ぶ 近世に至り Rousseau (1712—78) をはじめ、 Pestalozzi (1746—1827) や Fröbel (1782—1852) に刺戟影響され、子供(児童性)に学ぶことの必要に気づき、やがて「児童から」(Vom Kinde aus)の標語に代表される教育思想が胎頭した。今日、教育界においては、制度や内容、方法など広い範囲の領域で、教育閉塞の事実が指摘されている。こうした教育現実の打開には、教科教授の必要はいうまでもないが、教師が日常ふだんの教育実践のなかで、子供に目をそそぎ、子供の本性に深く学び、そこから汲み出す理念の深化と、教育活動の再組織こそ必須である。Rousseau がエミール (Emile ou DeL'Education) を著わし、Pestalozzi が子供に魅了され、Fröbel が子供に神性を見出したのも、いずれも以上子供の自然本性(内面自然)に学んでの結果といえる。つぎに引用する小沼和(東京城山小学校長)「子供に学ぶ」は、その意味で示唆にとんだ印象深い一文となっている。そこには日常子供(児童性)に触れ、愛をそそぎ、何気ない幼い子供の振舞いからも深く学ぶ、異色な教師の思想と感性がみられる。

初秋の風が肌に快よい夕方の商店街は活気に満ちていた。なかでも自然の実のりと、季節感がうず高く積みあげられた八百屋の店頭のみずみずしさは、格別で魅力的である。私は学校の行きかえりに、それぞれの商店にならべられた品物を眺めるのが好きであるが、初秋の店先の物産には、何か郷愁すら感じるのである。……そのようなある日のこと、よちよち歩きの子どもが、人ごみのなかから泳ぐようにあらわれ、八百屋の店先にたたずんだ。そしてじっとぶどうの一房を

みつめ、やがて恐る恐るそれに指を触れ、その感触を味っているかのようであった。ちょうど落日の陽ざしが西に傾いてぶどうの房をほんのりと赤紫につつま。その美しさとぶどうの甘露に酔っているようにみえる幼児の姿は可憐で、一幅の絵をみているようで幻想的ですからある。その時「何しているのよ」と、かん高い女の人の声が夢を破って、むんずと荒々しくその子の腕をにぎると、引き立て引き立て、たちまち雑踏のなかに姿をけした。すでに日は落ち、電燈のあかりは一段と明るさをましたが、はなやいだ商店街とはうらはらに、八百屋の店頭は空しく、あのぶどうの房も色あせてみえた。

このことがあってから私は心の整理に数日かかり、今もあの子の心を折にふれて、あれかこれかと思惟して果てることがない。あの子は数多い果物のなかからぶどうをえらび、こわれ物にでもさわるように、いとおしげに愛撫した。……あの柔い心配りは、いったいどこからきたものなのだろう。あのとしでものを愛で、美を感じるとすれば、その心の神秘は、あまりにも短い幼児の人生のどこで、いつ学び身につけたのだろう。幼児の心を知ることはむずかしい。しかし遠い昔は私自身もそうした心を宿していたはずであった。……思えば宗教も学問も芸術も、ひとの創造になるものである。ひと自ら自然の摂理の所産であれば、自然のことわりにすべてを宿していて、何んの不思議もないはずである。私は教育が成り立つこの自然の原理を、あの八百屋の店先での子どもを見るまで、あやうく忘れかけていた自分に気づいた。……子供の成長は、幼なければ幼いほど、急速で神秘的ですらある。しかし親であり教師である私は、それでも満足してはこなかった。子どもの本性は親や教師に何を求め、何を希っているかを、私はいままでどれほど知っていたらう。いやそれ以前に、子どもの自然（本性）を子どもの偉大な力と認識して、それを畏敬し、子供（本性）絶対の信仰に生きていたらうか。また子どもによって触発され、教え救われていた自分に気づいていたらうか。……親や教師の愛を無心に受けいれ、批判も拒否もしない幼な子の心は、ひとにひそむ子どもの本性（自然）である。あの店先の幼な子も、だから美しいものを知り、敬虔な祈りにも似た気持を、ぶどうに触れる行為で表現したのだろう。私はいまあの幼な子に深く学ぶ。

子供に学ぶ教師の目と心は、また前出「ほんとうの教育者はと問われて」所収、金沢嘉市「子供たち」のなかにもある。その文章は「私にも慕情つきぬ師がある。しかしここに述べようとしているのは、もう一つの師、私の前で清純なその目を輝かし、じっと耳を傾けている子供たちである」と以下のように書かれている。これをみても子供（本性）に愛をそそぎ、畏敬し、子供（児童性）に学ぶ教師の姿勢が、どれほど深く大切なもので

あるかの一端がわかる。子供（本性）に学ぶこと，そこには昔も今も変わらない，教育の秘密を解く鍵がある。

私にも慕情つきぬ師がある。しかしここで述べようとしているのはもう一つの師，私の前で清純なその目を輝かし，じっと耳を傾けている子どもたちである。

私の長い教師生活の中で，教え子たちの言ったことや，やったことによって，私は多くのことを学んできた。戦後の私が，虚脱状態の中からやっと立上がり，日本は再び戦ってはならないと，心にきびしく不戦の誓いをし，つねに平和憲法の初心忘れまじ……としているのは，戦場に散った数多くの教え子たちの，悲痛な声なき声が，私の耳の底深く残っているからである。また，現在の私の学校では，授業時間を削減して，遊び時間をふやしている。これも，もとはといえば子どもに教えられたことからであった。ある日，私の学校を訪問した朝日新聞社の記者は，授業時間が終わって校庭にかけ出してくる子どもたちの充実した目に圧倒されたと言った。それに今まで気のつかなかった私は，改めて外に出てくる子どもたちを見たとき，目標の遊び場目がけて一さんにかけていく彼らの目は，まさに充実そのものであることを知った。なぜ今までこのことに気がつかなかったのか，文部省指導要領の拘束性に気をとられ，授業時間の充実のみを考えて，遊び時間は授業時間のつけたしとして，五分，十分しかとっていなかったわれわれ教師のいたらなさを恥じたのである。これは文部省をみつめて，子どもを見つめていなかった証拠である。そこでただちに授業時間を削って遊び時間をふやすことにふみ切ったのである。それ以来だんだんとよみがえってきた子どもたちの生きた自然の姿を見て，これでよかったと思っている。

子どもはなおも私たちに教えてくれる。私は週一回朝礼のときに日本の民話を話している。子どもたちはそれを待っていてくれる。教室で教師からきく民話にも目を輝かしている。そして，もっと，もっととせがむ姿は，ひなが親どりの餌を待つ姿にも似ている。今の子どもたちは，テレビのドタバタものや，刺激の強いものにならされていて，静かに素朴な民話などきをく耳はなくなったと言う人もあるが，そうではない。子どもたちを見るがいい，静かに目を輝かせてきき入っている姿が教えるものは何か。アメリカ的消費文明のなかで，安定感を失ってしまったといわれる子どもたちも，庶民の知恵，庶民の素朴な感情が織込まれている民族の伝統に共感を持つ日本の子どもであるということである。私はまた，子どもたちの純粋な曇りのない言葉にわが身のいたらなさを嘆くことがしばしばある。二度とこないはずらを繰返さないために，「……これからいい子になるか」としかりつけたとき，「いい子になれるか，なれんかわかりません」としよげながら答えた子。また，忘れものをした女の子に対して，「なぜ忘れたか」ととがめたとき，しばらく考えていたが，「持ってくるのを忘れてしまいました」



と答えたこと。私はこの子らの前に、何とおろかな問いをしたものだと、教師というものの思いあがり、紋切型の返事を待つごうまんさを恥じねばならなかった。そして教師こそ実は彼らの清純な魂を傷つけたり、偽善を教えているのではないかと思った。

教育、特に子どもたちへの教育を考えると、教師は子どもの言うこと、考えていることの真実を見きわめる力を持たなくてはならない。つまり子どもが見える教師にならなくてはならない。子どもが見える教師にのみ、この子どもたちに何をどう教えなければならぬか……ということがわかってくるのである。それには、まず教師自身に、子どもたちの言っていること、やっていることがびんびん響いてくるような新鮮な感覚がなくてはならない。新鮮な感覚を持つためには、教師の生活にもっとゆとりを持たせることとか、教育に自由の空気をみなぎらせなくてはならないという条件も必要であるが、まず教師自身が教壇をおりて人間になることである。教壇から子どもを見おろしている教師には子どもは見えない。子どももそばにはよってこない。お互いが人間的に解放された空気の中で、新鮮でみずみずしい感覚で交流し合うとき、はじめて子どもが見えるのである。そして、そこから教育が始るのである。このとき、子どもはまさにわれらが師ともなるのである。

ひとが子供に学ぶのは、上述諸例のような健康で、かつ何んの心配も不安もない子供たちからだけではない。むしろ病弱あるいは重患の子供から、その介護の過程を通して、かえって深く大人が教えられ、学ぶということがある。とりわけ重患の子供は、日常、生命の危機にさらされている。回生と死の危険が同時に目のまえにある。それをみつめ、愛をそそぎ、深く祈り、献身介護しているひとの場合には、誰でもいや応なしに生命と死、人間と神、愛と献身、犠牲と奉仕、信仰と信頼、悲哀と歓喜、希望と絶望、あるいは回生、健康そして感謝とは何かという問いを体験する。ひとの生涯のなかで、これほど深く酷薄な経験は数多くはない。下記引用の臼井且子手記「由美へ」は、そうした体験の貴重な記録である。これをみれば生後間もなく、心室中隔欠損症（榊原任東京女子医大教授執刀）と診断された重患の子供を、回生、健康にまで導く過程で、絶望から希望へ、悲歎から歓喜へ、感謝から謝恩に至るまでの両親の心の軌跡が手にとるようになる。子供に教えられ、子供に学び、子供によって救われた幸福な家族がこ

こにいる。その手記の終章の一部（抜粋）を記すとつぎのようになる。

午前中の回診の時でした。力強い声で先生がおっしゃったのです。「もう大丈夫だよ。由美ちゃん、良くがんばったね」と。……私は喜びに震える声で、「ありがとうございます」と何度も頭を下げました。「心臓の手術では、とても早い回復です」と先生がおっしゃった時、私ははじめて本当に、由美がこの世に誕生して以来の心の安らぎを覚えました。……これからは由美をつれて、一緒に散歩に行くこともできる。一緒に食事にも、ピクニックにも行ける。動物園に行くことも、デパートに買いものに出かけることもできる。夢にまで見た我が子と手をつなぎ、親子三人で歩ける日も遠くはない。……あの時、死ななくて本当によかった。今日までがんばってよかった。夫の寛大さ、優しさ、そして由美こそ私を支えてくれました。母と子の愛、母親とは強く美しく、暖くいつまでも咲き誇っていなければならないことを学びました。……今日まで死と闘ってきてくれた我が娘由美、いつまでも元気で、明るい愛らしい子供として育ててほしい。……今は一歳九箇月になりました。とても明るく元気な毎日です。苦しみ続けた十箇月も、今では思い出の一ページとなりました。今年の今頃は、長かった闘病、心労のクライマックスでした。今はまるで夢のようです。

早いもので由来はもう五歳になりました。あの苦しかった頃の出来事は、今でも思い出さない日はありません。しかし明るくおしゃまで、元気な娘を見ていると、あの頃のことは夢のようです。もう二度とあの苦しみは経験したくありません。……私たちの苦勞を知らない人たちは、私たちのことを、子供の体を気づかい過ぎるという人がいます。大げさだと笑う人もいます。もちろん今は健康児です。私達の心配をよそに陽気で歌とお話が大好きで、人なつっこく、自分のことは何んでもできる素直な子に成長にくれました。今では胸の傷跡を誇りに思っているようで安心しています。……こんなことができることができ、本当に幸せです。しかし世の中には私たちのように、幸運な方ばかりではありません。現在のように、心臓手術が成功するようになるまで、過去には多くの幼い生命が奪われ、その積み重ねが、今日に至っているのだと思います。そのことを決して忘れてはならないと思います。……私は娘を救って下さいましたすべての人びとに、いつも感謝の気持を持ちつづけて行きたいと思っています。娘にも感謝することを忘れないひとになってほしいと思います。今では私たちは世界一幸せ者です。子供のお蔭で、教えられ、救われて今日の自分に成長することができました。世の中には不運な方々が沢山いらっしゃいます。私たちは少しでも役に立ち、恩返しをしなければならないと思います。……素直で明るい由美、どうかいつまでも、いつまでも元気で、多くのすばらしい体験をし、幸福になってほしい。

## (5) 人々の影響

(一)ひとの影響 ひとからうける影響刺戟は、以上みてきた家族や教師、その他特別のひとの場合にかぎらない。むしろ偶然に出会った行きづりのひとから、かえって強い影響をうけることがある。例えば電車や汽車あるいはバスのなかで、見知らぬひとの振舞いに触発され、何気ない好意に接して親切の必要を学ぶことがある。街角で道をおそわって、心のぬくもり、豊かさを感じたとしてもふしぎではない。これらは日常茶飯の一例にすぎないが、ひとは実は未知のひとからですら強い刺戟をうける。そのことは国木田独歩の短篇、「忘れえぬ人々」をみてもわかる。独歩は明治4(1871)年千葉県銚子に生まれ、小官吏であった父とともに、岩国、広島、山口の各地に転住、同20(1887)年、十七歳のとき東京専門学校(早稲田大学の前身)に入学している。かれの作品には、少年時代の思い出をもとにした「少年の悲哀」、「春の鳥」、「画の哀しみ」などの短篇、代表作「武蔵野」、「欺かざるの記」と、詩集「独歩吟」、そしてここに引用する「忘れえぬ人々」などがある。以下はその一部抜粋であるが、阿蘇の噴煙を背景に、暮色のなかでみた見知らぬ若者の印象を、感銘深い筆致で書いている。

今から五年ばかり以前、正月元旦を父母の膝下で祝って直ぐ九州旅行に出かけて、熊本から大分へと九州を横断した時のことであった。僕は朝早く弟と共に草鞋脚絆で元気よく熊本を出発した。その日は未だ日が高い中に立野という宿場まで歩いて其処に一泊した。次ぎの日の未だ登らないうち立野を立て、兼ての願で、阿蘇山の白煙を目がけて霜を踏み栈橋を渡り、踏を間違えたりして漸く日中時分に絶頂近くまで登り、噴火口に達したのは一時過ぎでもあっただろうか。熊本地方は温暖であるがうえに、風のない好く晴れた日だから、冬ながら六千尺の高山もさまでは寒く感じない。高岳の絶頂は噴火口から吐き出す水蒸気が凝て白くなっていたがその外は満山ほとんど雪を見ないで、ただ枯草白く風にそよぎ、焼土の或は赤き或は黒きが旧噴火口の名残を彼処此処に止めて断崖をなし、その荒涼たる光景は、筆も口も叶わない。僕等は一度噴火口の縁まで登って、暫時くは凄まじい穴を覗き込んだり四方の大観を恣にしたりしていたが、さすがに頂は風が寒くって堪らないので、穴から少し下りると阿蘇神社があるその傍に小さな

小屋があって番茶位は吞ませてくれる、其処へ逃げ込んで団飯を齧って元気をつけ、又た噴火口まで登った。その時は日がもう余程傾いて肥後の平野を立籠めている霧靄が焦げて赤くなってちょうど其処に見える旧噴火口の断崖と同じような色に染った。円錐形に聳えて高く群峰を抜く九重嶺の裾野の高原数里の枯草が一面に夕陽を帯び、空気が水のように澄んでいるので人馬の行くのも見えそうである。天地寥廓、しかも足もとでは凄じい響をして白煙濛々と立騰り真直ぐに空を衝き急に折れて高岳を掠め天の一方に消えて了う。壮といわんか美といわんか惨といわんか、僕等は黙然たまま一言も出さないで暫時く石像のように立っていた。この時天地悠々の感、人間存在の不思議の念などが心の底から湧て来るのは自然のことだろうと思う。

いっそのこと山上の小屋に一泊して噴火の夜の光景を見ようかという説も二人の間に出たが、先きが急がれるので愈々山を下ることに決めて宮地を指して下りた。下りは登りよりかずと勾配が緩るやかで、山の尾や谷間の枯草の間を蛇のように蜿蜒っている路を辿って急ぐと、村に近づくに連れて枯草を着けた馬を幾個か逐こした。あたりを見ると彼処此処の山尾の小路をのどかな鈴の音夕陽を帯びて人馬幾個となく麓をさして帰りゆくのが数えられる、馬はどれも皆な枯草を着けている。麓は直きそこに見えていても容易には村へ出ないので、日は暮れかかるし僕等は、大急ぎに急いで終いには走って下りた。村に出た時はもう日が暮れて夕闇ほのぐらい頃であった。村の夕暮のにぎわいは格別で、壮年男女は一日の仕事のしまいに忙がしく子供は薄暗い垣根の蔭や竈の火の見える軒先に集まって笑ったり歌ったり泣いたりしている、これは何処の田舎も同じことであるが、僕は荒涼たる阿蘇の草原から駈け下りて突然、この人寰に投じた時ほど、これらの光景に搏たれたことはない。二人は疲れた足を曳きずって、日暮れて路遠きを感じながらも、懐かしいような心持で宮地を今宵の当に歩るいた。

一村離れて林や畑の間を暫らく行くと日はとっぷり暮れて二人の影が明白と地上に印するようになった。振向いて西の空を仰ぐと阿蘇の分派の一峰の右に新月がこの窪地一帯の村落を我物顔に澄んで蒼味がかった水のような光を放っている。二人は気がついて直ぐ頭の上を仰ぐと、昼間は真白に立のぼる噴煙が月の光を受けて灰色に染って碧瑠璃の大空を衝いているさまが、いかにも凄じく又た美しかった。長さよりも幅の方が長い橋にさしかかったから、幸とその欄に倚っかかって疲れきった足を休めながら二人は噴煙のさまの様々に変化するを眺めたり、聞くともなしに村落の人語の遠くに聞こゆるを聞いたりしていた。すると二人が今来た道の方から空車らしい荷車の音が林などに反響して虚空に響き渡って次第に近いてくるのが手に取るように聞こえだした。暫くすると朗々な澄んだ声で流して歩く馬子唄が空車の音につれて漸々と近づいて来た。僕は噴煙を眺めたまま耳を傾けて、この声の近づくのを待つともなしに待っていた。人影が見えた

思うと「宮地やよいところじゃ阿蘇山ふもと」という俗謡を長く引いて丁度僕等が立っている橋の少し手前まで流して来たその俗謡の意と悲壮な声とがどんなに僕の情を動かしたろう。二十四、五かと思われる屈強な壮漢が手綱を牽いて僕等の方を見向きもしないで通ってゆくのを僕はじっと睥視めていた。夕月の光を背にしていたからその横顔も明毫とは知れなかったがその逞しげな体軀の黒い輪廓が今も僕の目の底に残っている。僕は壮漢の後影をじっと見送って、そして阿蘇の噴煙を見あげた。「忘れ得ぬ人々」の一人は則ちこの壮漢である。

以上このほか、ひとがひとに影響をあたえ、あたえられる例は、吉屋信子著「私の見た人」所収、同著者とつぎの登場人物との多彩な交流、社交の様様についてみてもわかる。

(1)田中正造 (2)万龍・照葉 (3)徳富蘇峰 (4)三浦環 (5)新渡戸稲造 (6)小林一三 (7)グラーツィア・デレッダ (8)大杉栄 (9)九条武子 (10)モルガンお雪 (11)直木三十五 (12)中村吉右衛門 (13)宮城道雄 (14)九条日浄尼 (15)横綱玉錦 (16)与謝野晶子 (17)菊池寛 (18)高橋箒庵 (19)汪兆銘 (20)張学良 (21)七世宗十郎 (22)坂田三吉 (23)春日とよ (24)中谷宇吉郎 (25)久米正雄 (26)平出英夫 (27)長勇 (28)田村俊子 (29)美濃部達吉夫妻 (30)関屋敏子 (31)高浜虚子 (32)徳富愛子 (33)及川道子 (34)近松秋江 (35)竹久夢二 (36)湯川秀樹夫妻 (37)古今亭志ん生 (38)森律子 (39)現・歌右衛門 (40)井上正夫 (41)羽仁もと子夫妻 (42)徳田秋声 (43)大倉喜七郎 (44)藤蔭静樹 (45)小波と水蔭 (46)菅原時保 (47)市川猿翁

鹿野政直が、上出「私の見た人」の解説において、「吉屋信子の人生をよぎった登場人物は、豪華さと、そしてしばしば意外性をかねそなえていた」として、つぎのようにその有様を述べているのもうなづける。

いずれにしても吉屋信子の人生をよぎってきた登場人物は、豪華さと、そしてしばしば意外性をかねそなえている。豪華さは、おそらく彼女の人生の豊饒さにつらなり、意外性は、彼女の幼いころの生活につらなる場合が多い。作家としてのまたインタビュアーとしての幅ひろい活動のなかでえたこぼれ話、俳句や相撲馬やなど趣味の生活のなかでためてきた思い出、少女としてかいまみた巨人たちの追憶、そういったものが、まるで小篋から一つ一つとりだされた真珠のように、きらきら光をはなちつつ並んでいる。

(二)未知未見のひと このほか「底のぬけた柄杓—憂愁の俳人たち—」(吉屋信

子) 所収「私が見なかった人」, あるいは同著「ある女人像—近代女流歌人伝—」をみれば, 既知, 未知未見のひとを問わず, 多くのひとびとが深刻にひとを魅了し, 大きな刺戟影響をあたえあう事実気づく。上出書所載の登場人物について, その名前をあげるとつぎのようになる。

- (1) 底のぬけた柄杓 (1)私が見なかった人 杉田久女 (2)墨堤に消ゆ 富田木歩  
 (3)一身味方なし 岡本松浜 (4)つゆ女伝 渡辺つゆ (5)底のぬけた柄杓 尾崎放哉  
 (6)月から来た男 高橋鏡太郎 (7)河内楼の兄弟 安藤赤舟・林蟲 (8)岡崎えん  
 女の一生 岡崎えん (9)救世軍士官 石島雉子郎 (10)盲犬 村上鬼城 (2) ある  
 女人像 (1)富田林の旧家 石上露子 (2)若狭の登美子 山川登美子 (3)時は償う  
 原阿佐緒・石原純 (4)梅白し 茅野雅子 (5)三ヶ島葎子の一生 三ヶ島葎子 (6)  
 淡路島の歌碑 川端千枝 (7)彼女の勲章 藤蔭静枝 (8)浅間は燃ゆる 杉浦翠子  
 (9)ある女人像 今井邦子

#### 参 考 文 献

- (1)原田実 人間形成の明日 (2)中山一義 日本教育史 (3)小沢恒一 青年教育概論  
 (4)南原繁編 矢内原忠雄—信仰・学問・生涯— (5)夏目漱石 坊ちゃん (6)  
 壺井栄 二十四の瞳 (7)島崎藤村 破戒 (8)石坂洋次郎 青い山脈 (9)国木田独歩  
 武蔵野 (10)秋田雨雀 先生のお墓 (11)有島武郎 一房の葡萄 (12)吉屋信子  
 小学校の三先生 (13)松本清張 小学校の先生 (14)岡本太郎 純粹な生命の戦慄  
 (15)矢内原忠雄 新渡戸博士 (16)原田実 片上伸先生の思い出 (17)稻富栄次郎訳  
 大教授学 (John Comenius, : Didactica Magna.) (18)押村襄訳 エミール(Jean-  
 Jacques Rousseau, : Émile ou De L'Éducation.) (19)小原国芳訳 人間の教育  
 (Friedrich Fröbel, : Die Menschenziehung.) (20)小沼和 子供に学ぶ (21)金沢  
 嘉市 子どもたち (22)臼井且子手記「由美へ」(23)吉屋信子 私を見た人 (24)同  
 私が見なかった人 (25)同 ある女人像—近代女流歌人伝—